

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail : nishikouarigatou@gmail.com
#ありがとう西高

Instagram : nishikouarigatou
twitter : @nishiko_arigato
ブログ : <https://thanksomiyawest.blogspot.com/>

制服の歴史を振り返る

大宮西高校にとって制服は、学校の魅力の一つである。女子の卒業生や在校生に、西高を志望した理由を聞くと「制服が可愛かったから」という意見が必ずと言っていいほどあがる。そんな西高の制服はどのように変遷していったのか。今回は北校舎4階にある書庫の史料をもとに、制服の変遷について解説する。

平成初期に大改定、人気校の象徴に

西高は今年で設立57年目。設立から現在までに制服は大きく三度改定されていた。時代の流れと共に振り返っていくことにする。

設立当初の女子生徒の制服は、濃い色のブレザーに同色の細いプリーツスカートで、中には白いシャツを着ていた。書庫にあった史料にはモノクロのアルバムしか残っておらず、黒色なのか紺色なのかは判別できない。同時期の男子生徒は詰襟、いわゆる学ランである。史料を確認していると、女子生徒の夏服にはジャンパースカートを採用している時期もあったようだ。

平成初期になると、男女共に淡いグレーのブレザーに変わり、女子夏服はセーラースタイルになった。現行制服の原型になっており、この時期から西高の志望者が増えていき、入試倍率がかなり上がったといわれる。

その後、いくつかの理由によって女子夏服

のセーラースタイルが廃止となり、現在のワイシャツとスカートの姿になった。スカートは夏用と冬用でデザインが違い、夏用の爽やかなデザインも冬用の深みのあるデザインも女子生徒から人気だった。現在は夏用デザインが廃止され、冬用デザインだった濃いグレーに深い緑のチェック柄のみとなっている。男子制服はブレザースタイルに緑のレジメンタル柄のネクタイ。ズボンは女子のスカートと同じ柄だ。女子は色違い3種類のリボンを選べる。これも制服の人気のひとつだ。近年は、スカートの裾に"N"の花文字が刺繍されるようになった。

制服は西高の歴史と共に変化していき、生徒にとって心に残る思い出の一部となっている。この記事を読んで、懐かしい制服と共に、卒業生それぞれが西高の記憶を思い出さきっかけになることを願う。



各時代の制服。左から、開校時、昭和後期、平成初期、現在の姿。学校案内や卒業アルバムから抜粋。

「最後の文化祭」公開日は9月14日

9月13日(金)、14日(土)は西高にとって最後の文化祭となる「西高祭」が催される。昨年度同様「ありがとう西高！」実行委員会は、卒業生によるイベントを企画。また今年、3年生のみという少数で行うため生

徒会OBOGが中心となって運営補助を行う予定だ。卒業生ブースに興味のある卒業生は、8月25日(日)にサポーターズミーティングがあるのでぜひ参加してほしい。詳細は本紙の各公式SNSアカウントまで。



静けさに包まれた配架スペース (2019年5月撮影)

あの場所は、今 -図書館編-

私は在校当時、明るいイメージのある西高生としては少し珍しい、大人しい部類の生徒であった。西高の賑やかさは嫌いではなかったが、時々それを忘れて静かな場所に行きたくなることがあった。そういう時はいつも図書館に通っていた。

活気ある西高生はこの図書館という静寂極まりない空間は苦手なのだろうか、利用者はそう多くなかった。いるのはおそらく私と同じ目的を持っている者だけ。心のどこかでそういう共通目的を持っているという安心感があったからなのか、図書館の静寂には寂しさはなく、心地良さがあったように思う。

先日、取材(「ありがとう西高！」新聞第11号のトップ記事)として久しぶりに図書館にお邪魔させていただいたのだが、そこで感じたのは、ただの静けさだけだった。

生徒も司書の先生もいないことも勿論あるが、それでも異様なほど静かだと感じた。その異様さはおそらく、次の学校へ引き継ぐために紐で束ねられている幾つもの本が一番の要因であったと思う。この図書館が、この学校が変わっていくということの寂しさをその本の束が告げているように感じたからだ。

生きている以上、周りのものが変わっていくことは避けられない。喪失は寂しいことだが、何かを「次につなげていく」ということが可能であると信じたい。慣れ親しんだ図書館が変わっていくことを寂しがらるより、束ねられた本が新校の図書館に運ばれ、未来へつながっていくことを願おうと思う。(高橋)

大宮西高伝

やるからには本気で、在学中の決意

緑川 静香さん（女優）

西高時代から読者モデルとして活躍し、卒業後は女優の道を歩む緑川さん。一見して、華やかな高校生活を送っていたように見える彼女だが、家での生活は「貧乏」の二文字に尽きる状況だった。そんな彼女が、読者モデルから女優を志し、今も力強く前進し続ける原動力には、母親の存在があった。涙を交えながら語ってくれた、インタビュー後編。忘れられない母親とのエピソードとは。

母が買ってきた 2冊の掲載誌

高校1年生、入学式の帰り道に雑誌からのスカウトを受けた緑川さんは、「セブティーン」の読者モデルとしてデビューする。とても嬉しいニュースだったが、その頃の緑川さんの家庭は本当に貧乏（本人談）で、一日の食費にも余裕が無い状況だった。「そんな中でも、雑誌の発売日にお母さんが黙って2冊買ってくれてたんです、1冊ならず2冊も。あの頃の金銭感覚で、2冊買うなんて本当にありえなくて。ありがたいやら何やらで大泣きしてしまっ」と語る。今でもこの話をするときは涙声になってしまうらしい。ちなみに後日、掲載誌は雑誌社からタダで貰えることを知り、驚いたという。

それだけ窮していた状況での「2冊事件」は、緑川さんの仕事への姿勢を、そして将来



今年8月末に、ミュージカル舞台「ニッキー」の出演を控えている。

を決定づけることになった。「芸能界の仕事は、頑張っている姿をいつでも家族に見せられる。やるからには本気でやろう、やらなきゃいけないと思った瞬間でした」と緑川さん。育ててくれた母親への恩返しは、まだまだこれから。お母さんは今も元気いっぱいなので、もっと活躍している姿を見せていきたい、まだ全然足りないと言ってくれた。

女優にタレントに そして舞台へ

読者モデルとして高校生デビュー、卒業後は女優の道へと進み、近年はタレントとしてバラエティ番組に出演したりと、活躍の幅を広げている緑川さん。今いちばん集中している活動について聞いてみた。

「頂いたお仕事は何でも集中して取り組んでいます（笑）直近でいちばん時間をかけて準備しているのは、ミュージカルです」と教えてくれた。この8月末公開予定の舞台「ニッキー」で主人公ニコルの母親役に起用されているのだという。稽古に汗を流す毎日

なのだと教えてくれた。

西高時代の経験で、今にも活かしていることはあるか伺ってみた。「ダンス部での経験が本当に大きくて。オーディションの緊張感。あと、本番ステージ上での高揚感は、今にも繋がっている気がします」という。ちなみにオーディションは用意周到に取り組んでいて、詳細な設定を自分で作っているのとか。「CMも舞台も、オーディションとして参加するときは、配役の背景事情を全部決めてから取り掛かっていて、バックボーンを含めて決めてから演じます」と語ってくれた。

閉校関連イベント ぜひ参加したい

「西高が閉校となることは友達から聞いて、ビックリの一言。私にとって高校生活は一生戻れない花の時代だった」としみじみと語る緑川さん。閉校関連イベントについては、仕事の予定がつけば参加できるかもとのことだ。「せっかくならMCで参加させていただきたいですね」と元気に話してくれた。